

「馬場小室山遺跡フォーラム」第85回ワークショップ

【復興の原動力！パズリック・アーケオロジー2018】

馬場小室山遺跡とまちづくり環境の「かわり」から、「山田湾文化」の復興パズリック・アーケオロジーへ

＜馬場小室山遺跡研究の新展開—縄文塚(「環提土塚」集落)の終焉と地域文化の解体にみる広域運動の解明—＞

知識・経験・思考・領域等にみられる現代的限界(建て前の×や+)からの知的解放(本音の÷や-)を目指して活動します！

新展開1	「ムロさま」の「限界領域」打破 (墓場の公共性にみる墓式と葬式、及び「人骨集積」の真相)	馬場小室山遺跡「第51号土壙」から展望する縄文時代の葬墓式と「土器社会論」—「ムロさま」の「累積型改新土坑墓」と「積葬墓」から探る「追埋設型土器棺集積墓」への途— (ムロ1) 寺野東遺跡の「積葬墓」(「SX036埋設土器遺構」)に注目 (ムロ2) 青森県の後期前葉「再葬壺棺墓」／列島晩期の再葬動向／「金田一型土器棺墓」／土井ヶ浜遺跡の「弥生再葬墓」 (ムロ3) 福島県鳥内遺跡の晩期終末の「追埋設型土器棺集積墓」と弥生時代前期の合口土器棺による「積葬墓」の土器社会論 (ムロ4) 鳥内遺跡の弥生時代前期から中期初頭の「追埋設型土器棺集積墓」に観る北方砂沢式系文化から「御代田式」へ、そしてと中部条痕文系土器による交替劇の様相 (ムロ5) 中部から北関東西部における前期の「再葬壺棺墓」から中期初頭の木棺墓への移行を「阿武隈文化」と比較し、東関東や南奥と関係の深い前期の「再葬壺棺墓」として田川流域の栃木県芝工業団地内遺跡の様相を把握する。 (ムロ6) 「焼葬」(秋田県藤株遺跡の頭蓋骨無し)、「焼人骨集積」(岩手県萩内遺跡)、「人骨集積」(愛知県保美貝塚)と抜歯、そして「髑髏信仰」(長野県宮遺跡の「積葬墓」) (ムロ7) 「人骨集積」と抜歯はく犬歯>VS<犬歯+第1小臼歯>の2系列が顕在化 (ムロ8予告) 「人骨集積」から「土器集積」(祭式と葬式の統合)、そして「土器棺集積」へ
新展開2	「オムちゃん」と「ムロさま」との「限界知識」打破	土偶と土面／顔面付土版／人面文土器等の関係、そして容器形土偶／顔壺へ (オム1) 泉坂下人面イデオロギーの拡散ネットワーク (オム2) 「人面文インダストリー論」による「亀ヶ岡型変相イデオロギー」の出現 (オム3) 「仮面土偶」の発達と「突起土偶」、そして山形土偶の形成 (オム4) 印旛沼と仙台湾、そして山田湾まで繋ぐ人面把手の意義 (オム5予告) 「髑髏信仰」と「亀ヶ岡型変相イデオロギー」、そして「ムロさま」 (オム6予告) 「髑髏信仰」は「ムロさま」から容器形土偶や顔壺の土坑墓へ
新展開3	「シオ(塩)もん」の「限界経験」打破 縄文時代の製塩土器は「採鹹・せんごう土器」が真相！固形塩の物流ではなく、「大形魚塩蔵品」・「汽水系塩煮品」に留まらず、濃縮海水を内陸で希釈する「淡水魚塩煮」の普及か？	「製塩土器」の確立から製塩遺跡の操業へ、爆発的普及の晩期社会と「定住制」の定着 (シオ1) 定住制社会から生業往還としての製塩遺跡へアプローチ (シオ2) アマモやヨシ(アシ)の「草木灰」は濃縮工程での使用か？ (シオ3) 製塩遺跡の操業タイプ(短期型と長期型)と燃料問題 (シオ4) 下布田遺跡の「製塩土器」在地性は古鬼怒湾型変遷との乖離！／枯れたアマモを特定の場所に集めて乾燥させる「塩草場」の存在、及び天日と地熱(熱砂)利用の採鹹・せんごう工程に相応しい「製塩土器」鉢形態の確立 (シオ5) 宇都宮市刈沼遺跡からは寺野東遺跡よりも多数の「製塩土器」が検出し、在地で淡水魚の「塩煮」が浮上。鬼怒川流域の口縁部形態は下布田遺跡とは大きく異なり、古鬼怒湾型変遷の1系列である口縁部水平ヘラカットが定着 (シオ6) 三陸北部における「製塩土器」の年代と系統(1)久慈市大芦Ⅰ遺跡の長胴深鉢形態と僅かな出土点数に注目した「採鹹・せんごう土器」の提唱
新展開4	「タマきみ(君)」の「限界思考」打破	ヒスイ製勾玉・小玉の晩期流通(関東各地域拠点でも製作)と弥生時代中期中葉「再葬壺棺墓」への流通実態(上越周辺北信経由)解明 (タマ1) 熊谷市飯塚南遺跡の土坑墓出土ヒスイ製勾玉と飯塚遺跡群 (タマ2予告) 長野県坂城町保地遺跡の抜歯人骨とヒスイ製垂飾品の年代

1.【新春博覧考古】：縄文時代の土器と石器・石製品に初詣！

1-1. 馬場小室山遺跡の土器と石器・石製品について

(1) 緑泥石片岩はどこから来たか？

・鴨志田準司さんによる奥秩父・奥武蔵山城への山行の副産物として、当該地域における地質分布への関心が高まり、東秩父村関場遺跡へと辿り着いたようです。そこで馬場小室山遺跡の緑泥石片岩の特徴を明らかにし、産地を検討します。

(2) 武笠家分家道端採集の「加曾利B1-2 式」に新旧あり！

・西関東や東京湾沿岸に展開する独特の3単位突起土器群の突起について観察します。

1-2. 水戸市南台(軍民坂)遺跡出土石器の年代は？

・縄文時代中期中葉から後期前葉までの土器片が認められる那珂川下流域左岸の集落遺跡から採集した資料の内、頁岩製石器や草創期に類例の多い打製石斧の特徴を抽出して検討します。

1-3. 「製塩土器」の形態について

・霞ヶ浦の稲敷市広畑貝塚、加須低地の加須市六十軒遺跡、大宮台地の馬場小室山遺跡と伊奈町本(ほん)遺跡の「製塩土器」を観察します。

1-4. その他

・青森県や岩手県などの石材や土器もお披露目します。

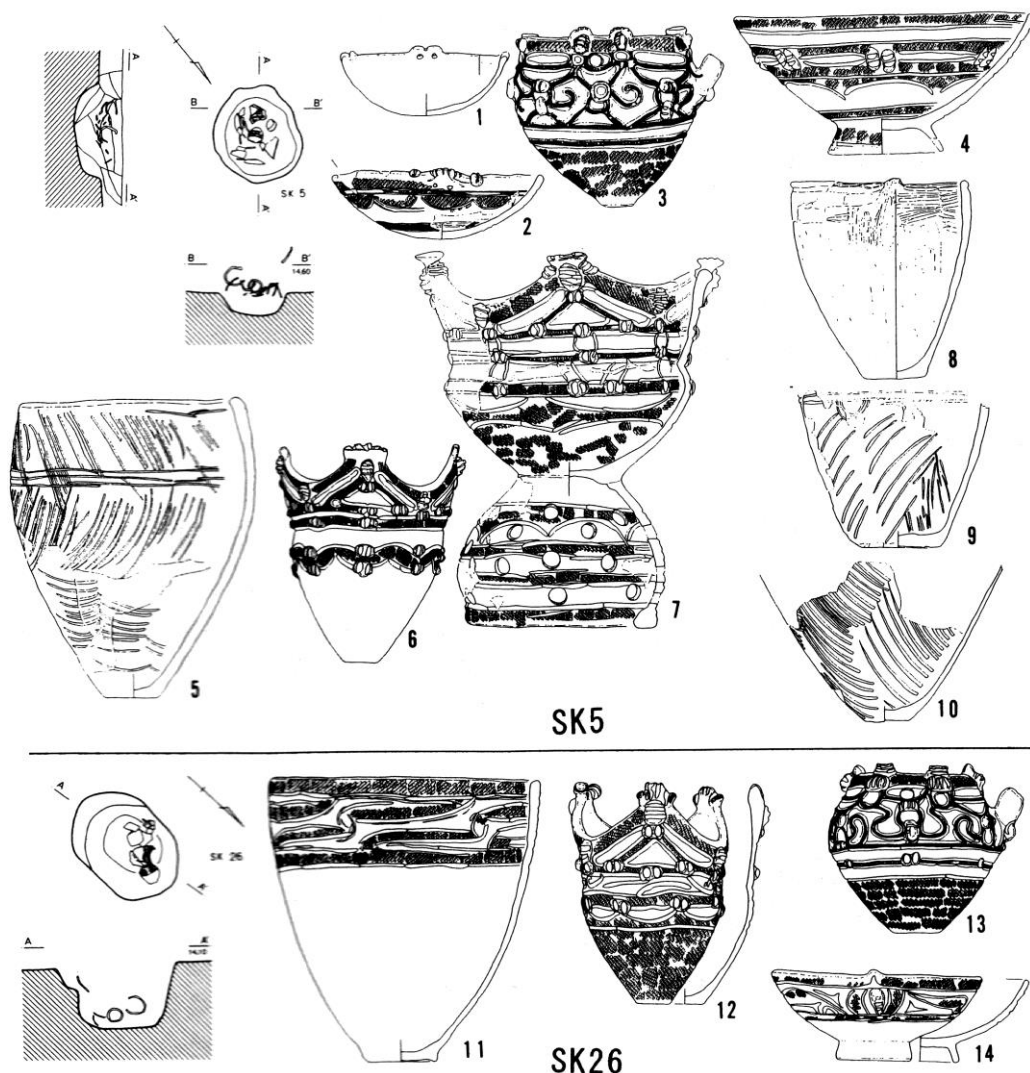
2.【「土器集積」から「土器棺集積」へ】：所謂「再葬墓」の一風習である集積行為の原風景を遡及！

★「人骨集積」、「髑髏信仰」に続く弥生時代へ移行する葬墓式キーワードとして、東日本における縄文時代晩期の「土器集積」遺構(初頭から前葉の土坑から始まり、中葉にかけての配石、そして中葉から後葉にかけての不整形の掘り込みから土器が多量に出土する場合など地域的にも年代的にも多様)について注目するのは、「埋設土器(壺)棺」の集積も晩期末葉に盛行し、弥生時代前期～中期前葉にまで確実に盛行するからです。

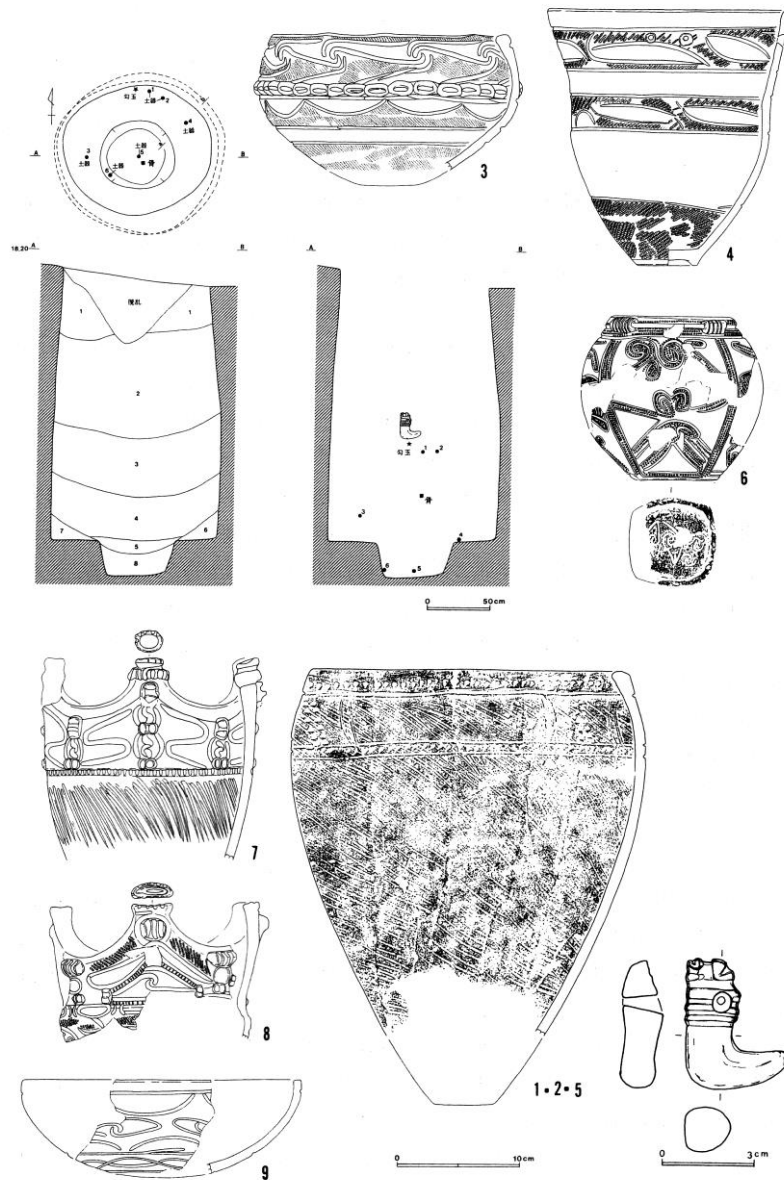
今回は入門的に「土器集積」の開始イメージと弥生時代の特徴を簡単に紹介します。

2-1. 大宮台地に特徴的な晩期開幕を告げる土坑墓の二者(「土器集積」遺構と「地下施設型」遺構)

古代 第128号 2012年2月



第4図 雅楽谷遺跡 SK5 (1~10)、SK26 (11~14) 出土土器



第1図 南方遺跡第5号土坑と出土遺物

2-2. 弥生時代前期後葉の油田遺跡の「土器棺集積」：（ムロ3）と（ムロ4）の壺棺と異なり、鉢が主体！

★土坑墓と再葬壺棺が組み合う例は新潟県村尻遺跡12号土坑が「再葬土器棺土坑墓」の好例。

340号土坑内土器の埋設過程模式図

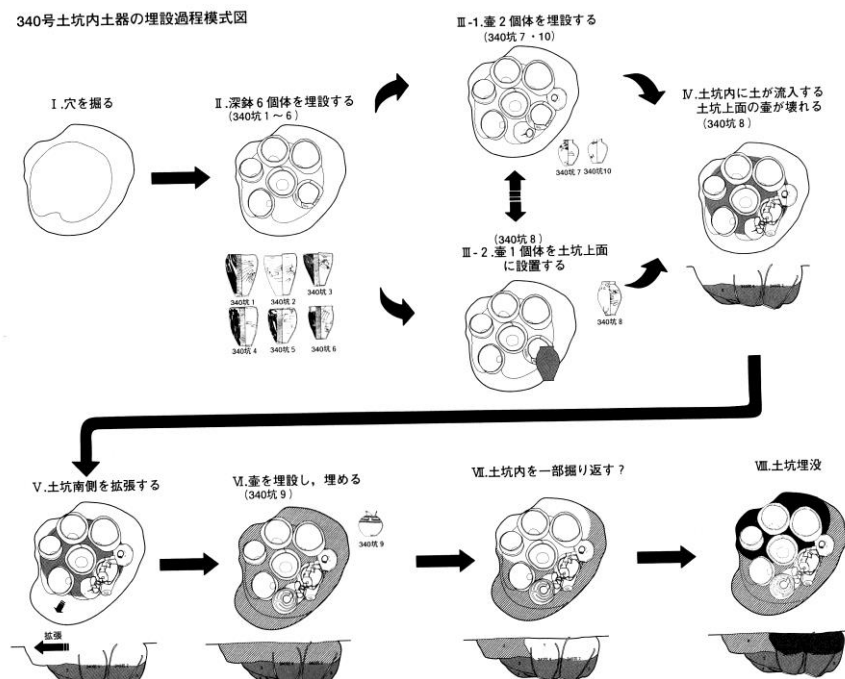
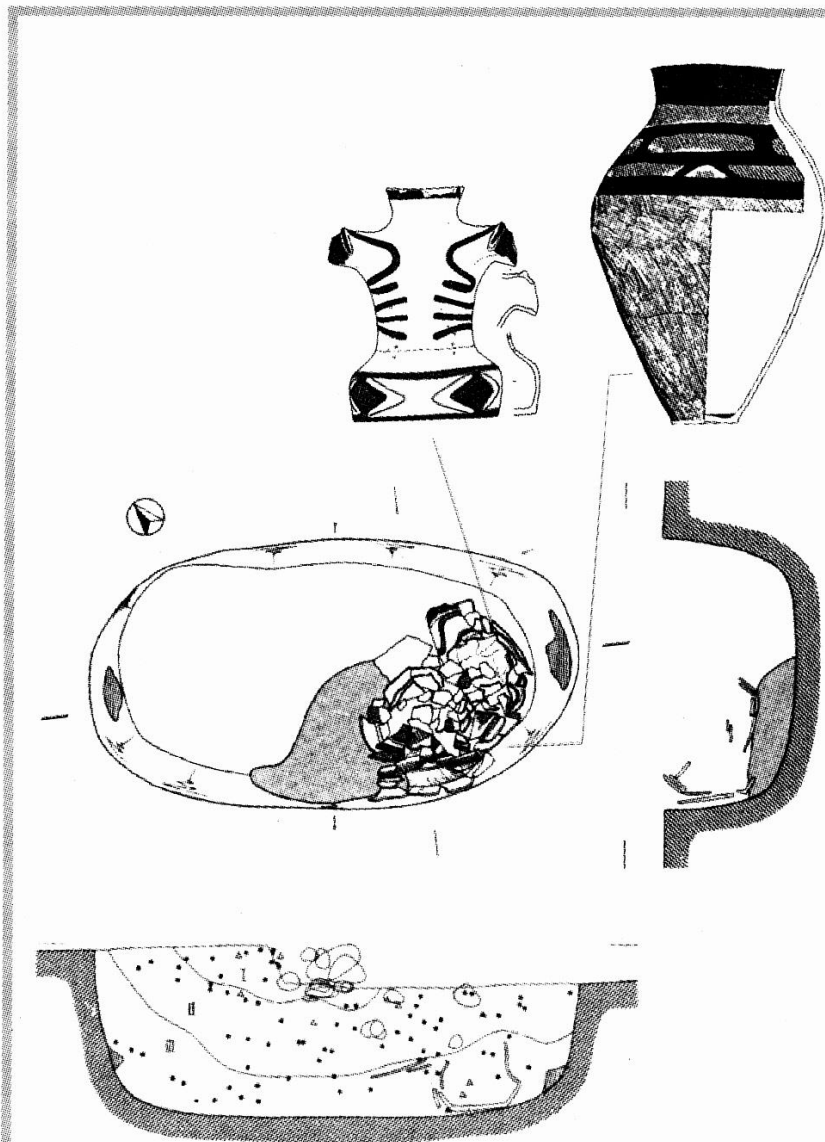


図601 再葬墓の属性と340号土坑模式図



新潟県新発田市 村尻遺跡12号土坑
[新潟県の考古学：2000より転載・加筆]

3.【「シオ(塩)もん」の話題】：「縄文塩」の実態と「採鹹・せんごう土器」による希釈ネットワークの確立

3-1. 加須市六十軒遺跡の「製塩土器」―「シオもん」の広域性を考える―

- ・加須市にはスーパー堤防関連で発掘された長竹遺跡が著名ですが、現地説明会の折に「製塩土器」が展示されました。近年、宇都宮市刈沼遺跡や長竹遺跡など往時の海岸線から遠隔の集落から出土する状況について、改めて富士見市正網遺跡での逡巡が想起されますので、これまでの検討経緯を振り返り、内陸への適用がいかなる生業であるのか、改めて概論します。
- ・馬場小室山遺跡の「製塩土器」研究(2009年の日本考古学協会発表)を通して考察した「縄文潮汐エンジン」と「製塩土器」の出土意義が理解されていないので、改めて注目することにします。
1976年時点では浮島周辺と古鬼怒湾ラグーン地帯に見られる貝塚群の大型魚類に注目し、固形塩の流通を否定し、塩蔵品の物流を考察しました。その後、浮島周辺のマダイを特産物とし、ラグーン地帯はスズキとクロダイなどと魚類を絞り込み、更に汽水域全体への普及に伴い、仕掛け漁による多種の小型魚類を「縄文塩」の対象としました。即ち、古鬼怒湾岸名物のマダイ・クロダイ・スズキ等の「大型魚食文化」塩蔵品に対し、新たに奥東京湾や古鬼怒湾奥部における仕掛け漁の「小型魚食文化」では小魚類塩蔵品(塩煮)である「縄文佃煮」の想定に至りました。
- ・更に内陸における「製塩土器」の用法も汽水域と同様に考えるならば、海辺において持ち運びに適するまで水分を蒸発させ、時には固化に近い状態まで「せんごう」した「縄文塩」を内陸の集落で希釈後、淡水魚を塩煮保存する遠隔生業往還を考えてきました。
- ・近藤義郎等の想定する広畑貝塚の固形塩は古代塩業観の適用であり、縄文イノセントであるとして、1976年以来唱えてきた「縄文塩」は、固形塩とは用途が全く別、結晶化は必要最低限で、従って「せんごう」も不要な地域もあり、「焼塩」工程も全く想定する必要はありません。既に検討してきました北奥や内陸の「製塩土器」には器種の単純性に特徴が見出せるからで、濃縮工程のみに「製塩土器」の使用が想定され、濃縮・希釈のネットワークにより、懸案であった淡水魚の「塩煮」も射程に入りました。参考までに石毛直道は淡水魚による魚醬を強調しています。

日経(朝刊) 2017-11-23

【第三種郵便物認可】

農学博士号

私の履歴書

石毛直道

②

魚醬とナレズシを研究

東・東南アジアの食文化考察

品のはずだが、まとまった先行研究がなかった。信頼できる文献資料も少なかった。それなら自分がやってみるしかない。私は国立民族学博物館の助教で、漁業生態学を専攻するケネス・ラドルさんと一緒に徹底的な現地調査をすることにした。味の素の研究助成金を使い、1982年から4年かけてアジア13カ国

この漁獲の時期はアジアの気象現象であるモンスーンの影響を受けていた。モンスーンと密接に関連する農業形態といえは水田稲作である。東南アジアの大陸部では雨期に増水した河川から水があふれて水田に流れ込み、そこで魚

が、現在の日本ではほとんど姿を消している。私には塩辛系食品の魚醬を液体状に加工したものを魚醬と呼んだが、それも日本では秋田のシヨツルや能登半島のイシリなどしか残っていない。細かい理由は省くが、私は味噌や醤油のような植物性の発酵食品である穀類より魚醬

が、現在ではほとんど姿を消している。私には塩辛系食品の魚醬を液体状に加工したものを魚醬と呼んだが、それも日本では秋田のシヨツルや能登半島のイシリなどしか残っていない。細かい理由は省くが、私は味噌や醤油のような植物性の発酵食品である穀類より魚醬

が、現在ではほとんど姿を消している。私には塩辛系食品の魚醬を液体状に加工したものを魚醬と呼んだが、それも日本では秋田のシヨツルや能登半島のイシリなどしか残っていない。細かい理由は省くが、私は味噌や醤油のような植物性の発酵食品である穀類より魚醬

としてみよう。同じような発酵食品として、鮎ずしのように塩と米飯を使ったナレズシもある。かつては日本をはじめ東アジアでも普通に食べられていた。魚醬もナレズシも、東アジアと東南アジアに共通する食文化を考へるうえで重要な食

品のはずだが、まとまった先行研究がなかった。信頼できる文献資料も少なかった。それなら自分がやってみるしかない。私は国立民族学博物館の助教で、漁業生態学を専攻するケネス・ラドルさんと一緒に徹底的な現地調査をすることにした。味の素の研究助成金を使い、1982年から4年かけてアジア13カ国

この漁獲の時期はアジアの気象現象であるモンスーンの影響を受けていた。モンスーンと密接に関連する農業形態といえは水田稲作である。東南アジアの大陸部では雨期に増水した河川から水があふれて水田に流れ込み、そこで魚

が、現在の日本ではほとんど姿を消している。私には塩辛系食品の魚醬を液体状に加工したものを魚醬と呼んだが、それも日本では秋田のシヨツルや能登半島のイシリなどしか残っていない。細かい理由は省くが、私は味噌や醤油のような植物性の発酵食品である穀類より魚醬

が、現在ではほとんど姿を消している。私には塩辛系食品の魚醬を液体状に加工したものを魚醬と呼んだが、それも日本では秋田のシヨツルや能登半島のイシリなどしか残っていない。細かい理由は省くが、私は味噌や醤油のような植物性の発酵食品である穀類より魚醬



タイの加工場には魚醬のかめが並んでいた

タイの加工場には魚醬のかめが並んでいた。論文は有力国立大学の文系大学院に提出したらという話もあったが、やめた。文学部出身者が農学博士になる方が面白い。その代わり、論文には化学分析など自然科学的な論理構成も必要で、手間はかかった。この学位論文は世界で初めて魚介類の発酵食品の食文化と科学を総合的に考察したものとなった。(文化人類学者)

- ・「縄文塩」は、「大型魚食文化」と「小型魚食文化」により「採鹹・せんごう」の程度を異にし、「採鹹・せんごう土器」の希釈ネットワークにより、内陸においても淡水魚の「塩煮」を可能にした可能性が高い。故に「縄文塩」は「藻塩焼く」ことも、古代塩業の技術基盤となることも決してないであろう。

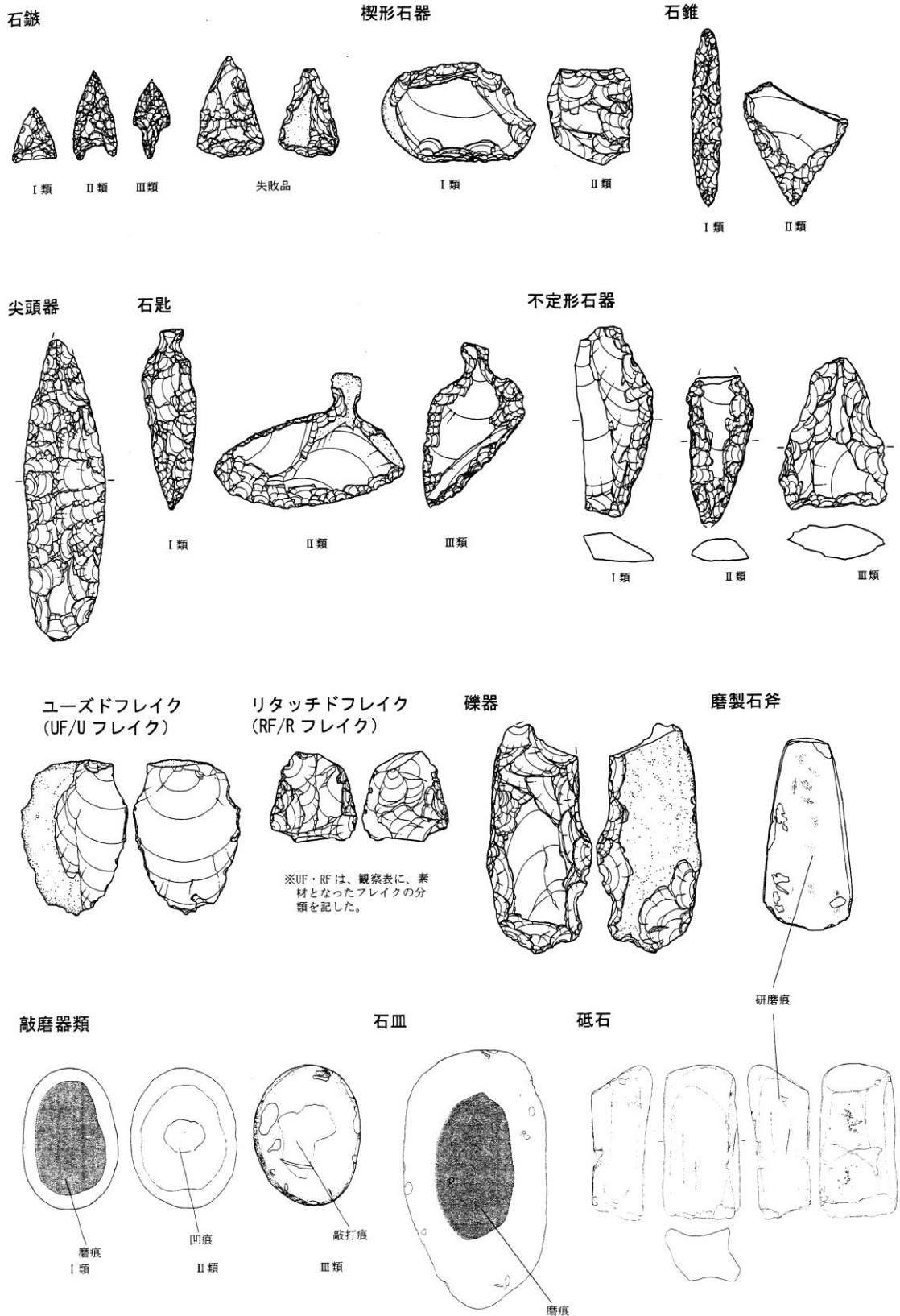
3-2. 北三陸の「製塩土器」瞥見—「製塩遺跡」はどこにある?—

・沈降したリアス式海岸と隆起した海岸を念頭に容れながら、「製塩土器」出土遺跡との生業関係について予断を許さずに検討します。これまで検討してきました階上町寺下遺跡(鈴木・鴨志田は実見済み)と久慈町大芦I遺跡ですが、関東地方の「製塩遺跡」の「製塩土器」出土状況とは全く異なり、寧ろ大宮台地の出土状況に近いですが、大きな違いとして完形土器など遺存率の高い土器群にも際立った特徴が見られます。

・レビューする「製塩土器」出土遺跡は以下の文献を利用します。

菅原弘樹(2016)「東北地方北部における土器製塩」『日本考古学協会 2016 年度弘前大会 第1分科会 津軽海峡圏の縄文文化研究報告資料集』

4. 【「山田湾まるごとスクール」のプレゼン準備活動】：川半貝塚に学ぶ(2)



4-1. 山田町の貝塚を考える視点の確立

・2011年10月10日の釜石泊で同じホテルでしかも偶然同じ酒何処でもご一緒した二人連れと、「山内清男のサケ・マス論」で大いに盛り上がりました。3・11関連で水産学関係者とのこの不思議な出会いを思い出すとき、つくづく「山内清男のサケ・マス論」は卓見との感慨が深くなります。

・第84回ワークショップ(12/9)から新たなテーマとして山田史談会の川端弘行会長から今夏に問題提起されたチャレンジ「山田町の復興関連事業の発掘調査で現地説明会が行われた遺跡を分かりやすく紹介してほしい」、という対応が追加されました。そこで山田湾のリアス式海岸環境と馬場小室山遺跡など関東地方の内湾環境を相対化する研究を進め、「山田湾文化」を追求することにします。

・川端会長のコレクションが大浦小学校の畠中遺跡でもあり、避難道造成のための発掘では人面把手が目撃されたので、その来歴の検討を開始しました。また、川端会長のお住まい周辺も川半貝塚として著名で、その上位面が高台移転用地として発掘され報告書が刊行されたので、川半貝塚に暮らした人々の文化的動向(特に縄文原体から見た交流)や生業について接近したいと思います。

・関東地方の内湾系貝塚が砂泥底性の「浜(ハマ)貝塚」であるのに対し、山田湾は岩礁沿岸性の「磯(イソ)貝塚」であるため、貝塚景観が関東地方とはかなり異なりますし、特にその生業として海獣類やマグロ・カツオなどの大形魚を代表とするにとどまらず、それに加えて改めて注目したいのが、

【1. コンブなど海藻の干物】

【2. 小形魚の「塩煮」】

【3. 山内清男のサケ・マス論】

の3点となります。五十嵐聡江さんが注目する蝦夷のコンブ漁だけでなく、北三陸の「製塩土器」との関係も併せて議論できそうです。

今回の新たなテーマも馬場小室山遺跡の多面的な研究視点を踏まえつつ深掘りしていきます。

4-2. 川半貝塚の概要：今回は石器について生業との関係を検討します。

(1)『岩手の貝塚』から山田町の貝塚を抜粋すると、次の6貝塚が記載されている。田ノ浜(大洞)貝塚が不明とあるのは現況のことと思われ、学史的な貝塚遺跡(小田島禄郎による発見と発掘(1929年)、水野孝昭による骨角器の紹介(1936年)、および吉田義昭による発掘調査成果(1968年)など)であることは、現地での配布資料(鯨(マッコウクジラ)骨製品など)を見ただけでも明らかです。

川半貝塚(標高15m・緩斜面)：「大木8b」/コウダカアオガイ・イシダタミ・コシダカガンガラ・クボガイ・タマキビ・クロタマキビ・ウミニナ・ヒレガイ・チジミボラ・レイシ・イガイ・ホタテ・マガキ・ウチムラサキ・アサリ・クチバガイ・ウバガイ・ヒメシラトリ・サビシラトリ・シラトリガイモドキ・チシマフジツボ・オオバフンウニ・マグロ類・カサゴ・フサカサゴ科など

(2)須原拓ほか(2017)『岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第668集 川半貝塚発掘調査報告書 町営災害公営住宅建設事業関連遺跡発掘調査』、山田町建築住宅課・(公財)岩手県文化振興事業団

・縄文時代前期前葉と中期後半の住居址や包含層が検出され、前者ではTo-Cuテフラ降下期以前のIV層(〜「大木2a式」)とTo-Cuテフラ降下期以後のⅢ層(「大木2b式」前後)に分離されています。縄文原体のパブリック・アーケオロジーを一つの柱とします。

5.【その他情報交換など】：自由な意見交換とワイン・アーケオロジー

5-1. 今後の予定

・3/3(土)・4(日) コムナーレ9Fで「山田湾まるごとスクール」のパネル展示・発表

★3/4(日)に次回のワークショップを行います。

・お花見ワークショップは、3/25(日)か4/1(日)で検討しますが、開花状況により4/8(日)になる可能性もあります。

2018年度版の「みぬまガイドブック」には埼玉大学有機農業研究会による

「弥生時代から見る！見沼の魅力」

が掲載予定です。予算の都合で2017年度版同様、4月刊行か？

5-2. その他

以上